

氏名	Parchaa Tsetsemaa		
学位の種類	博士（看護科学）		
学位記番号	博甲第 10333 号		
学位授与年月	令和 4 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	Impact of continuous support to a small group of women by midwifery students on women's childbirth experience in the public maternity hospital, Mongolia (助産学生による継続的支援がモンゴル公立病院の産婦の出産体験に与える効果)		
主査	筑波大学教授	医学博士	山海 知子
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	柴山 大賀
副査	筑波大学准教授	博士（ヒューマン・ケア科学）	川野 亜津子
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	小島 真奈

論文の内容の要旨

Parchaa Tsetsemaa 氏の博士学位論文は、モンゴル国の産科病院における助産師養成課程に在籍する学生が陣痛・出産時に産婦に対して継続的に支援を行うことによる産婦の出産経験や出生時の転機に与える影響について明らかにするために介入を行った研究である。その要旨は以下のとおりである。

第 1 章において、著者は研究に至った背景を述べている。ここ数十年の世界のマタニティケアの動向をみると、妊娠出産時の合併症のリスクのある女性に対して、妊産婦死亡、死産、新生児死亡を防ぐために施設での出産を促進してきたが、開発途上国では施設やマンパワーの面で十分とはいえない状況にある。また、出産時の医療介入が着実に増加している一方、女性の出産能力や個人的なニーズ、価値観、好みが出産体験に影響を与えており、マタニティケアにおける出産に関わる尊厳、平等、ケアの質の課題は、特に開発途上国で課題として残っている。WHO & Partnership for Maternal Newborn and Child Health (2014) によると、ヘルスケアの質やパフォーマンスを評価する上で、出産経験に対する満足度を測定することの重要性が認識されてきている。近年、国際機関では、母体や新生児が妊娠出産時の合併症から生き延びることにとどまらず、産婦、児、家族の健康と生命の可能性を満足させ、すべての女性に質の高い尊重されたケアを提供する方向に広がっていることが示されている。2018 年 2 月、WHO は、全人的で人を中心としたケアと人権的なアプローチによる女性の出産経験の改善を強調した「ポジティブな出産経験のための産科内ケアに関するガイドライン」を発表した。ネガティブな出産経験が産後うつや心的外傷後ストレス障害などの心理的問題と関わることから、ポジティブな出産経験が重要視され、陣痛から出産時における支援者による継続的な支援が推奨されているが、広く行われているのは欧米諸国等の一部の高所得国に限られ、モンゴル国のような低・中所得国では公的な出産支援サービスが一般的ではない現状がある。そこで、出産数が多く、物理的なスペースがなく、出産に関わる支援を行うドゥーラやバースパートナーといった専門家がないモンゴル国において、助産師課程の学生 1 人が 2~4 人の産婦に対して継続的に支援をする仕組みを考案し、これによって、産婦の出産満足度が向上するとともに助産師課程の学生実習に組み入れることで学生への教育効果が得られると考えられると述べている。以上から著者は助産師課程学生の継続的な支援により出産の満足度は向上するのか、同様に臨床の転帰が改善されるかの 2 点をリサーチクエスションとしている。

第2章において、著者は支援の定義、ドゥーラなど訓練された支援人材の紹介、支援によって生ずる生体的変化、女性の出産経験の意味とそのモンゴル国における現状、出産経験の測定に関する先行研究を文献検討としてまとめて示している。

第3章において、著者は研究の対象と方法を示している。著者は出産時の継続的な支援の影響を評価するために、コスト面、無作為化の倫理的不適切さ、介入前に出産体験の調査が不可能であることから独立した介入しない群「介入前群」を用いた1グループ・ポストテストオンリー準実験的デザインを採用している。著者はランバートルにあるモンゴルでも有数の二次的な公的な産科医療機関を対象施設とし、必要なサンプルサイズと1日の平均出産件数から調査期間を42日と設定している。調査期間中当該施設で出産予定者全てのリストを入手し、陣痛室・分娩室・新生児室の医療記録から入院・出産日、人口動態、分娩時の妊娠年齢、分娩方法、新生児数、出生時の新生児の生育状況、出生時の体重、アプガースコア、妊娠・出産時の合併症、妊娠中の合併症、陣痛の始まり、出産時に受けた医療介入、陣痛室の滞在時間と陣痛時間等を取得し、包含基準、除外基準に則り研究対象を特定している。著者は女性の出産経験を評価するためにDenkerらによる出産経験質問票(CEQ)22項目、Smithによる女性のケアに対する満足度の評価Women's view of birth labor satisfaction questionnaireを参考にしたケアに対する一般的な満足度2項目を測定に用いている。著者はWildらが概説した「患者報告アウトカム翻訳と文化的適応のための原則」に従い、英語に堪能なモンゴル人研究者、助産師および産婦人科の専門家の協力を得て、英語の質問票をモンゴル語に翻訳し、産後女性にコグニティブインタビューを実施し修正を重ねて測定尺度を作成している。一方、助産師課程学生に対し48時間のドゥーラ研修プログラムによる支援の研修を行い、25名の学生による24時間シフト体制も整えている。一方、著者は介入前に相当するデータとして独立したサンプルから個人の特性、女性の出産経験と満足度を収集するクロスセクションパネル調査を実施している。著者は介入研究に関する倫理的配慮としてインフォームドコンセントを取得し、子宮頸管4cm開大から出産後2時間までの間に、助産師課程学生1人に対して2~4人の産婦への情報提供やアドバイス、アドボカシーを含む情緒的・身体的支援を行い、データを収集し解析を行っている。

第4章において、著者は結果を記載している。2019年10月から2020年1月にかけて最終的には介入前群420人、介入群408人のデータを分析している。介入前群との比較によって、介入群は陣痛室での滞在時間が減少し、CEQの自己能力領域、専門家支援領域、完全性知覚領域、産科領域において出産体験に対してポジティブな傾向が認められている。ドゥーラサポートと出産経験についての重回帰分析を行った結果、ドゥーラサポートによってケアに対する満足度が上昇していることが示されている。

第5章、第6章において、著者は考察し以下のように結論づけている。モンゴル国の公立産科病院に見られるように、物理的スペースの不足と患者数の多さが出産に寄り添うことを妨げている状況下で、助産師課程の学生が、同じ陣痛室を共有する2~4人の女性という少人数のグループに対して、出産時の継続的なサポートを提供し、モンゴル国における女性中心のケアを推進する方法としての実現可能性をこの研究結果から示すことができたとしている。通常のケアを受けた女性と比較して、継続的な支援を受けた産婦においては、陣痛室での滞在時間が有意に減少し、ポジティブな出産体験が増加し、ケアに対する満足度が高くなることが認められることから、産婦への継続的な支援の重要性を示すとともに助産師課程学生の教育的効果についても言及されている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究はモンゴル国における陣痛及び出産時の継続的な支援が出産経験に与える影響に関する初めての介入研究である。800人余の自然経膈分娩に関する詳細かつ貴重なデータを計画的に収集し、陣痛から分娩にかけての継続的な支援がポジティブな出産経験をもたらすことを示し、一方で、助産師課程学生の出産支援がもたらす教育的な側面をも示唆する独創的な研究である。医療資源や人材に乏しい開発途上国における医療専門家の教育方法と出産支援の在り方の両方に関する貴重な内容と評価できる。

令和4年1月26日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(看護科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。